

2024. 12. 1 (日) 使徒20:22~27

20:22 ご覧なさい。私は今、御霊に縛られてエルサレムに行きます。そこで私にどんなことが起こるのか、分かりません。

20:23 ただ、聖霊がどの町でも私に証しして言われるのは、鎖と苦しみが私を待っているということです。

20:24 けれども、私が自分の走るべき道のりを走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音を証しする任務を全うできるなら、自分のいのちは少しも惜しいとは思いません。

20:25 今、私には分かっています。御国を宣べ伝えてあなたがたの間を巡回した私の顔を、あなたがたはだれも二度と見ることがないでしょう。

20:26 ですから、今日この日、あなたがたに宣言します。私は、だれの血に対しても責任がありません。

20:27 私は神のご計画のすべてを、余すところなくあなたがたに知らせたからです。

<説教>

〈私は今〉(20:22)と言っているパウロはそのときミレトスにいました。彼はそこからエペソに使いを送って、エペソの教会の長老たちを呼び集めました(17)。集まって来た彼らにパウロは、自分は最初から常に、自身に降りかかる数々の試練の中で、主の奴隷として謙遜の限りを尽くし、涙とともに主に仕えてきた、と語りました(18-19)。具体的には、〈益になることは、公衆の前でも家々でも、余すところなくあなたがたに伝え、また教えてきました。ユダヤ人にもギリシア人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰を証ししてきた〉ということでした(20-21)。ユダヤ人もギリシア人も、つまりすべての人の益になること、すなわち救いになることの肝心要(かんじんかなめ)は〈神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰〉なのです。パウロ自身がまず〈神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰〉のうちにいつも生きて〈主に仕えて〉いたので、そのことを伝え、教え、証しすることができました。

パウロは「私は今、御霊に縛られてエルサレムに行きます」と言います(22)。〈パウロは御霊に示され、マケドニアとアカイアを通してエルサレムに行くことにした〉(19:21)と既にありましたが、今は「御霊に縛られて」と言うところに、主に仕える「主のしもべ(奴隷)」としての自覚が現れているように思います。彼は自分を捨て、自分の意思を捨て、しかも、いやいやながらではなく、自ら進んで御霊の導きに従いました。だから〈そこで私にどんなことが起こるのか、分かりません〉が御霊が縛った縄に引かれるままにエルサレムに行くと言うのでした。

とは言え、既に聖霊によって示され、分かっていることがありました。「ただ、聖霊がどの町でも私に証しして言われるのは、鎖と苦しみが私を待っているということです」(23)。(鎖と苦しみ)、つまり困難、艱難がパウロを待っている、このことは主イエスがパウロを救い、お召しになった最初のときからずっと明らかにしておられたことでもありました。「彼がわたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示します。」と主は言っておられました(9:15)。その主のみことばの通り、パウロが多くの困難、艱難、試練に会って来たことは、これまで私たちが読んで来た通りです。更に今

後も「益になることを、公衆の前でも家々でも、余すところなく伝え、教え」、誰にでも「神に対する悔い改めと、主イエスに対する信仰を証し」するパウロには主の名の故の困難、苦しみが待っていることだけは確かなこととだと聖霊が証ししていると言うのでした。聖霊の証し・証言なら 100 %信じるしかない、信じなければなりません。それ故、〈鎖と苦しみ〉が確実に待っていることが分かっているにもかかわらずエルサレムに行くというパウロの決意、計画は変わりませんでした。〈神に対する悔い改めと主イエスに対する信仰〉の故の困難、苦しみは避けるべきではなく、むしろ生涯をかけて、そしていのちをかけて受け入れるべきだ、それが主のみこころだ、そう言う聖霊の証しをパウロはいつでもどこでも信仰の耳で聞き取っていたのだと言えるでしょう。

それで言います。「けれども、私が自分の走るべき道のを走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音を証しする任務を全うできるなら、自分のいのちは少しも惜しいとは思いません」(24)。確かにパウロは〈自分のいのち〉をかけていました。〈自分の走るべき道なり〉つまり自分の生涯をかけていました。それは「何に」「何のために」でしょうか。それは〈主イエスから受けた、神の恵みの福音を証しする任務を全う〉すること、そのために、でした。何でもいいから「命懸け」、「一所懸命」、「たとえ困難があっても負けずに前進」であればいいとか、そういう決心や信念それ自体が大事であり、生涯を賭け、自分のいのちを賭けるに値するというものではありません。ここでパウロは、「自分は神の恵みの福音を証しする任務を主イエスから受けたのだから、その務めと責任を果たし、主に仕えるため」に、自分のいのちを賭け、全生涯を献げると言うのです。かつて大日本帝国による神社参拝強制にいのちを賭けて抵抗し、殉教した韓国の朱基徹牧師も、日本の警察から説教することを禁じられたとき、「自分は説教する務めを主から受けたので、主が説教を止めよと言わない限りは止めない。自分は自分の務めを果たす」と言って説教を続けました。それもパウロと同じく、任務をお与えになった主イエスに対する責任を命懸けで果たした姿でした。

そして、このような「自分のいのちは少しも惜しいとは思わず、自分が神から受けた、神の恵みの福音を証しする任務を忠実に果たす」姿の原型は主イエスご自身であることを知らなければなりません。つまり、神のひとり子イエスは、父なる神のみこころに従って、神の御姿を捨てて人となってこの世に生まれてくださいました。それがクリスマスの出来事です。イエスは人として完全に神に従順に生き、罪を犯しませんでした。イエスは自分の罪ではなく、私たちの罪のために、ご自分のいのちは少しも惜しいと思わず、十字架にかかって私たちのために死んでくださり、私たちが受けるべき神のさばきを受けてくださいました。そして三日目によみがえり、死に打ち勝ってくださいました。神はこのイエスを信じて悔い改める（神に立ち返る）私たちのすべての罪を赦し、永遠に滅びることのない永遠のいのちを与えてくださり、救ってくださいます。そのように、主イエスは神の恵み、義と愛を私たちに証しする任務を全うしてくださったのです。パウロや朱基徹牧師がいのちがけで自分が主イエスから受けた努め、責任を果たしたのは、罪深い自分のために主イエスがご自分のいのちを捨ててくださったことを信じ、感謝していたからです。

そんな命懸けの故にパウロはもうエペソの長老たちと顔を合わせることはないと考えていました(25)。それで、厳かな宣言をしました(26-27)。〈私は神のご計画のすべてを、余すところなくあなたがたに知らせた〉(27)とパウロは言いますが、これもまた元々は主

イエスがなされたことでした。先に言った、(神であり) 人としての地上の生涯がそうでした。そしてそれ以前にはやがて地上に来られるご自分のことを旧約の預言者や聖書記者たちに聖霊によって前もって語らせ、書かせなさいました。また十字架の死とよみがえり後、昇天後もやはり同じくパウロやルカやその他の新約聖書記者たちに聖霊によって、ご自分が成し遂げられた預言の成就、救いを、神の恵みの福音を語らせ、書かせなさいました。そして今も主イエスにご自分を信じる私たち、教会に聖霊を与えてくださり、私たちに〈神の福音の恵みを証しする任務〉を与えてくださいました。

「主イエスから受けたこの大事な任務を全うできるなら、自分のいのちは少しも惜しいとは思わない」。これは確かにパウロが考え、告白したことです。しかしそれはパウロの「独創」「創作」ではありません。主イエス・キリストの心、みこころであり、主イエス・キリストから出てパウロに与えられたものです。だからこそ、信仰故のどんな困難の中でも決して消えることなく、止むことはありませんでした。私たちもこの同じ主イエスから受けた任務、責任を止むこと無く、果たす者とさせていただきます。